

## 国際収支の長期的変化：パターン分析

明 石 茂 生

### 1. はじめに

国際収支の内容に応じて経済発展の段階を推し量ろうという考えに「国際収支段階説」がある（Kindleberger (1963, pp.458-61)）。経済発展とともに国際収支の内容が変化し、資本輸入国から資本輸出国に転じて、経済が成熟化すると経常収支が赤字化して資本輸出力を失うというものであった。1980年代、日本の経常収支の黒字が慢性化し、資本収支の赤字が拡大していったとき、日本は未成熟の債権国の段階に入り、成熟した債権国に向かっていくものと考えられた（『昭和59年版経済白書』第2章第4節）。

ところが、この国際収支段階説は一国の経済発展の立場から論じており、世界経済における超過貯蓄と超過投資のマクロ的な相互依存関係の視点が欠如しがちである（須田（1992））。国際（経常）収支の大きさは国内貯蓄と国内投資の差にもなることは周知のことであるが、長期的な国際収支の不均衡状態は、貿易・国際金融を通じて世界各国・各地域の超過貯蓄と超過投資の状態にそのままつながる。そして、それが構造的に定着して持続すれば、先ほどの国際収支段階説は必ずしも必然性をもたないことになる。単線的な段階説ではなく、歴史的に固有のシステムが存在して、段階説とは異なるストーリーを展開し得ると考えられるからである。

本稿は、以下において一世紀以上にわたる期間を眺めて主要国・地域の国際収支の特性を抽出していくのであるが、視点は以上のように段階説に

こだわらず、国際貿易システムの固有性をファクト・ファインディングとして取り出したいということである。

## 2. 国際収支のパターン

国際収支の長期的な動きを一世紀以上にもわたって追っていくには、利用可能なデータと対象国はきわめて限られている。貿易統計は比較的長期間利用可能であるが、通関統計が基本であるため、輸出は f.o.b. 値、輸入は c.i.f. 値で表されている。したがって、対象となる（見える）貿易収支（Visible Trade Balance）は f.o.b. 輸出額から c.i.f. 輸入額を引いた値となる。さらに、経常収支（Current Account Balance）は利用が限られていて、19世紀末から20世紀初頭の数値の多くは、推計に頼らざるを得ない。経常収支額は、別論文（明石（1995））で推計・集計されたデータを使用することにした。

一国（または地域）の経常収支  $BP$  は、その内容として貿易収支、貿易外収支そして移転収支によって構成されるのであるが、貿易収支  $VB$  を以上のように f.o.b. 輸出値マイナス c.i.f. 輸入値で定義すると、残りは見えざる貿易（Invisible Trade）の輸出入  $IVX$  と観光、特許料、投資収益、賃金所得（または送金分）の収支から成る部分  $TF$  によって構成される。つまり、

$$BP = VB + IVX + TF$$

である。

さらに、その国（地域）のカウンター・パート（相手国・地域）の経常収支額を  $BP'$  とすれば、

$$BP' = VB' + IVX' + TF',$$

であり、かつ

$$BP + BP' = 0$$

がみたされる。また、貿易上の収支は両国（地域）の間で完結するため、その見える貿易と見えざる貿易の収支合計はゼロとなる。それ以外の収支

$TF$  も同様に収支合計はゼロである。

$$VB+IVX+VB'+IVX'=0$$

$$TF+TF'=0$$

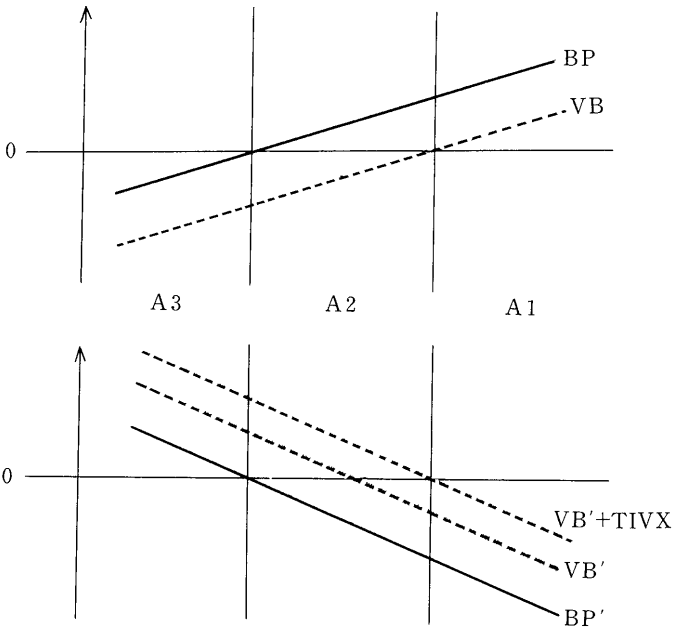
そうすると、経常収支と見える貿易収支の関係は次のようになる。

$$BP-VB=-(BP'-VB')+TIVX$$

ただし、 $TIVX=IVX+IVX'$  であり、全体の c. i. f. 輸出値から全体の f. o. b. 輸出値を差し引いた値に対応する。

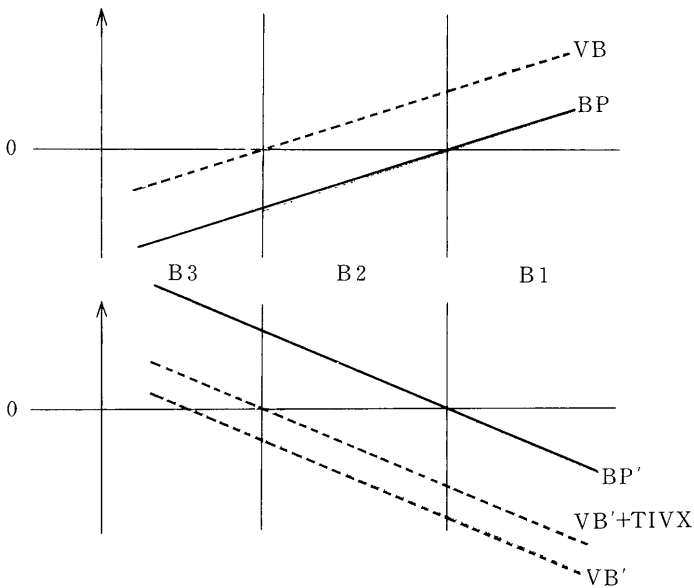
ここで、大きく経常収支  $BP$  が見える貿易収支  $VB$  より大きいケース（これをタイプAと呼ぶことにする）と逆に経常収支が見える貿易収支より小さいケース（これをタイプBと呼ぶことにする）に大別する。経常収支と貿易収支の符号によって2つのタイプはそれぞれ次のように3つの状況に類別される。

図1 タイプ A



タイプAは、経常収支  $BP$ 、貿易収支  $VB$  とともに黒字（正値）である状態（A1）、経常収支は黒字で貿易収支が赤字の状態（A2）、経常収支、貿易収支ともに赤字の状態（A3）に分かれる。これに対応して、カウンター・パートの状況が図1の下半部に描かれている。 $VB' + TIVX$  は見えざる貿易の総収入を含んでいるので、実際の貿易収支  $VB'$  はそれより小さい（赤字の方向）水準になる。したがって、貿易収支  $VB'$  が経常収支  $BP'$  より大きいかどうかは一概にはわからない。

図2 タイプ B



つぎに、タイプBが図2に描かれている。貿易収支、経常収支がともに黒字である状態（B1）、貿易収支は黒字で経常収支が赤字の状態（B2）、貿易収支、経常収支ともに赤字の状態（B3）の3つに分かれる。対応して、カウンター・パートも図2の後半部に描かれているが、直観的にわかるように、このタイプBではカウンター・パートにおいては貿易収支

$VB'$  は経常収支  $BP'$  より小さい。

歴史的に国際収支の動きを眺めていくと、経常収支・貿易収支の大きさ（黒字・赤字）が変化しても、タイプは構造的に変化しない事例が数多くみられる。経常収支の黒字・赤字は資本の国際的移動の状況を表し、それは長期的には投資収益の収支に大きな影響を与える意味でタイプの変化を促す要因である。資本輸入国か輸出国かの違いは自ずとそのタイプのあり方を規定することになり、長期的に維持可能なタイプ（状態）の体制が限定されてくる。また、逆にタイプが変化するケースは、とくにそれが国際貿易体制におおきく影響を与える国・地域である場合には、構造的変化の一形態としてとらえることができる。

本稿では、以上のような視点に立って、貿易体制の構造的変化の状況を歴史的に観察していこうとするのであるが、まず次節では大きく地域別に分けて1881年から1991年までの国際収支の動きを追って、その特徴を確認していくことにしたい。

### 3. 世界経済と国際収支

次の図3, 4, 5, 6は、主要な国・地域の経常収支と貿易収支を当該国・地域の輸入合計額で割った値（対総輸入比）の9カ年平均値を表している<sup>1)</sup>。各年次によって利用可能な国・地域が異なってくる（とくに2つの大戦期間は枢軸国のデータが欠落している）、ならびに第1次世界大戦以前の期間

---

1) 分析に使用した国際収支のデータについては明石（1995）を参照されたい。対象となった国・地域は、オーストリア・ハンガリー、アルゼンチン、オーストラリア、カナダ、中国、フランス、ドイツ、インド、イタリア、日本、ロシア・ソ連、南アフリカ、スカンジナビア、タイ・インドネシア、トルコ・イラク・シリア・サウジアラビア、連合王国（イギリス）、アメリカ合衆国である。ただし、オーストリア・ハンガリーとロシア・ソ連は第2次大戦後の期間は除いており、タイ・インドネシアは戦間期から第2次大戦後の期間までのデータを使っている。総輸入額は、USドルで換算された輸入額を合計した値であるが、分母となる総輸入額は対応する年次に経常収支が利用できない国・地域があればその国・地域の輸入額を削除して調整されている。

図 3

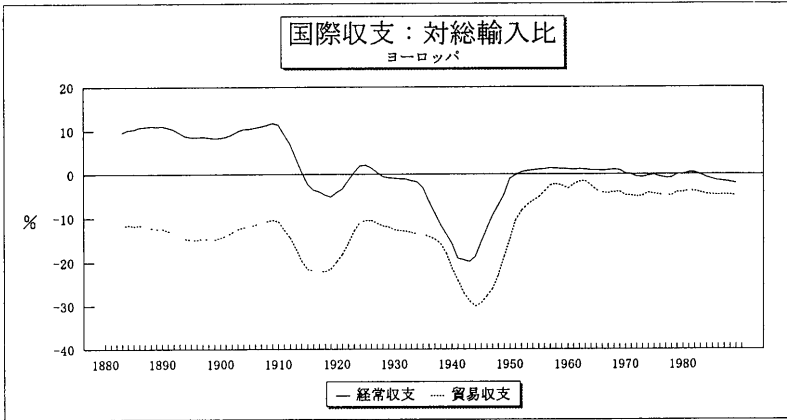
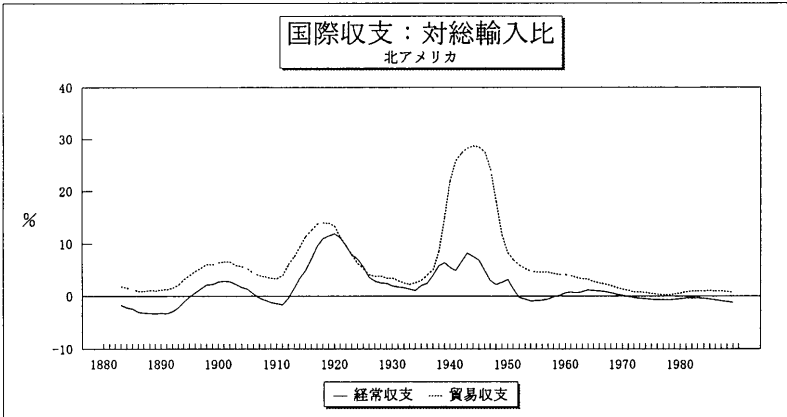


図 4



は推計値で補っているため、その後の期間の収支データにくらべて精度が落ちてしまうなどという、非整合的な部分もあるのであるが、それでも一世紀を超えた期間の国際収支の動向を地域別に追っていくことが可能である。経常収支・貿易収支を欧州、北アメリカ（アメリカ合衆国、カナダ）、その他の諸国に大きく分け、そして全体の合計額に負号をつけた値を残余分

図 5

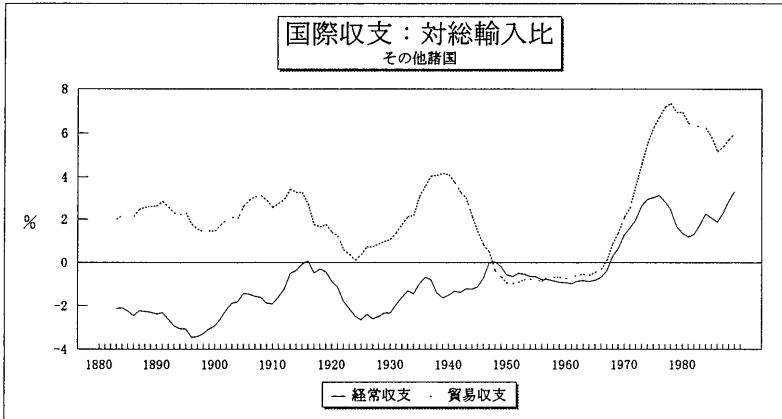
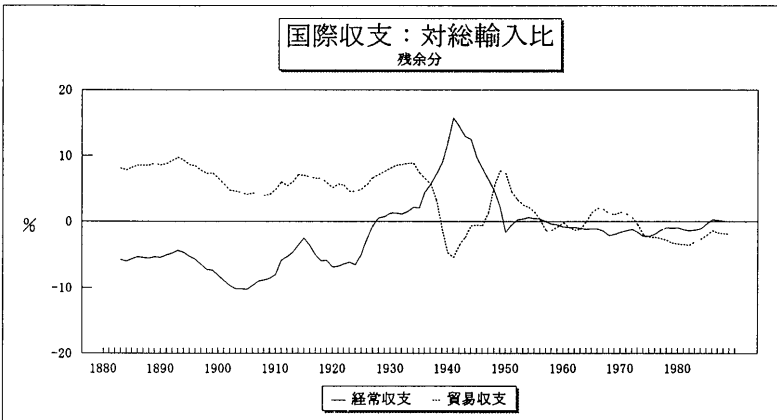


図 6



として（カウンター・パートにあたる部分として）別途にあらわすことにした。したがって、この部分の貿易収支には見えざる貿易の全体の収入分が組み込まれていることになり、実際に見える貿易収支にあたる値はより小さくなる。

図から観察される特徴は、欧州と北アメリカが少なくとも1880年代から

1950年前半までの期間、逆相関の関係にあったということである。欧州は終始一貫してタイプAであったのであり、第一次大戦までは総輸入比10%に及ぶ経常収支の黒字を計上していた。2つの大戦は大規模な資本流入を必要とし、第一次大戦後は戦前のような恒常的な大規模の黒字を計上することができなくなった。また、貿易収支は慢性的に赤字であり、その規模はやはり総輸入比10%以上にもおよび、これは第2次大戦時まで続いた。第2次大戦後の欧州の貿易収支はいままでになく総輸入に対する赤字幅を縮小させ、構造的に大きな変化があったことが推量される。欧州はA2（ときにはA3）の状態を維持してきた。

他方の北アメリカは、1880年代から90年代半ばまでB2の状態にあり、その後循環的な変動を示しながらもB3の状態に移り、1970年代以降再びB2の状態に戻ったといえるであろう。その間、欧州とは逆に2つの大戦期間には大幅な黒字を貿易・経常収支ともに計上しており、大量の資本（または公的援助）が北アメリカから欧州へながれたことを示している。

その他の諸国（ただし、アジアの比重が高い）は、ほとんどの期間タイプBであり、1950年まではB2の状態にあった。1950・60年代はB3またはA3の状態にあったのであるが、それ以前の状況とは全く異質である。また、1970年以降になるとB1の状態に移行して、その黒字幅を急激に拡大させている。これは、1970年代は中東諸国（とくにサウジアラビア）、1980年代は日本の黒字が大きく貢献していたからである。この点からも、この地域の構造変化は第2次大戦後であったといえるであろう。

そして、最後に残余分であるが、その内容が欠落分を反映していることから、年代によって質が異なることを認識しなければならない。それでも、カウンター・パートとして残余分をみていくと、1940年代が第2次世界大戦前後であり、資料の利用可能な国・地域がきわめて限られ特異であったことを考えてこれを除外すれば、大体1930年以前はカウンター・パートとしてA2の状態にあり、1930年代はA3に移ったことがわかり、



1950年代はA 1 かB 1, 1960年代はA 2, そして1970年代後半以降B 1 の状態になっている。1930年前後のいわゆる大不況期は資本の動きを構造的に変化させる節目であったといえよう。そして, 1930年代もふくめてこの時期までの残余分の内容を占める地域はラテンアメリカであり, アフリカであった<sup>2)</sup>。第2次大戦後はとくに1970年代以降を占める地域としてラテンアメリカ・アフリカだけでなく, NIES, 東南アジアなどが含まれるはずであるが, あくまでも残余分として動きであり, 陽表的な国際収支の動きを別途に追う必要があることはいうまでもないであろう。

#### 4. タイプ別分析

この節では, 主要な国・地域を個別的に取り扱って, 国際収支の歴史的動向を先ほどのタイプ別に分類してみていくことにしたい。(以下の図は対自国輸入比の9カ年平均値を表している。)

##### 4. 1 タイプA

タイプAの国・地域としては, 中国, フランス, イタリア, イギリスをあげた。(図7, 8, 9, 10)

中国(図7)は, 厳密にはタイプAの国とするわけにいかない。中華人民共和国成立後1950~60年代は, 貿易収支と経常収支がほぼ同一化しており, 強いて言えば, この期間中国はむしろタイプBのB 1 状態にあったからである。しかし, 1970年代になると再びタイプAに戻っている。さらにさかのぼって1890年代に一時的に経常収支が貿易収支以下になっていたが, これは日清戦争の賠償金支払のためである。これを除けば, 華僑によ

---

2) Lévy-Leboyer によれば, イギリスの場合, 1880年頃には欧州, 合衆国, ロシア以外の地域への海外投資残高は全体の4割弱であったのに対し, 1913年には全体の4分3になっており, フランスの場合は, 1880年頃は全体の3割弱であり, 1913年には4割であった。ドイツの場合も, 1913年は4割であった(Lévy-Leboyer (1977, p. 25))。

図 7

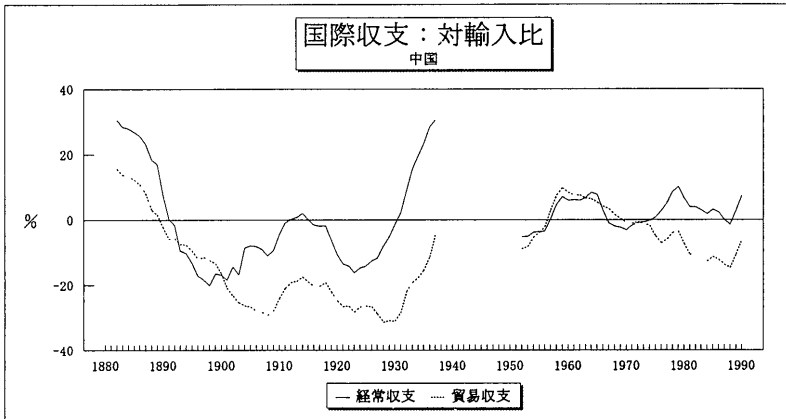
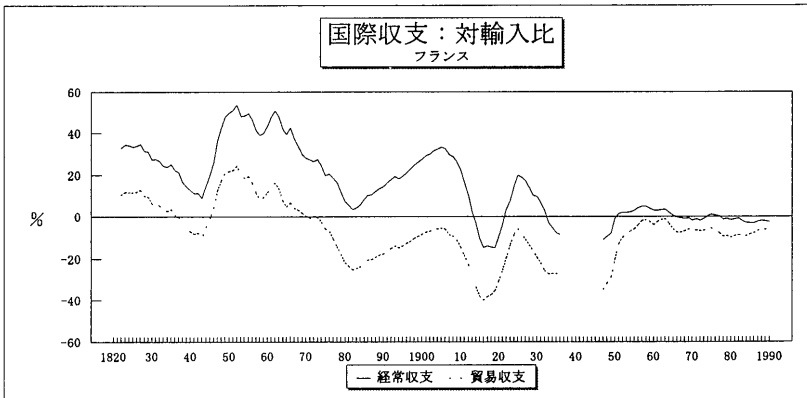


図 8



る巨額の海外送金がタイプ A の状況に中国を維持させていた。この間、中国は A 1 から A 3 状態になり、銀輸出のせいもあって 1930 年代は A 2 状態に転じている。タイプ A という性格は、1950～60 年代を除いて、現在に至るまで本質的に変わっていないように思われる。1970 年代以降、中国は A 2 状態になっており、貿易収支は赤字であっても海外送金を含めた他の収

図9

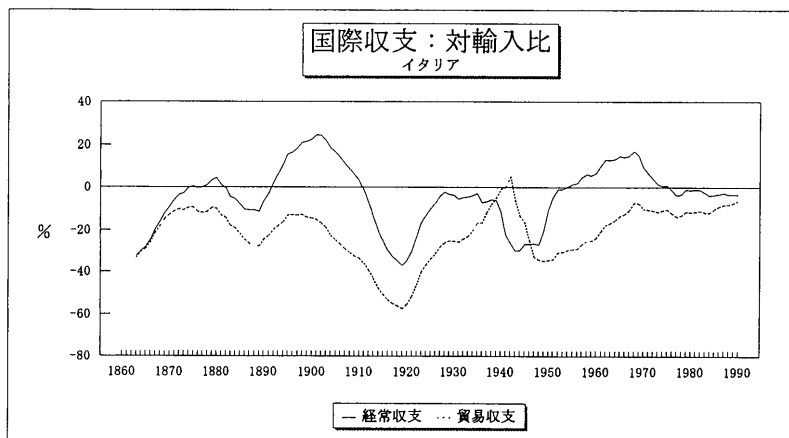
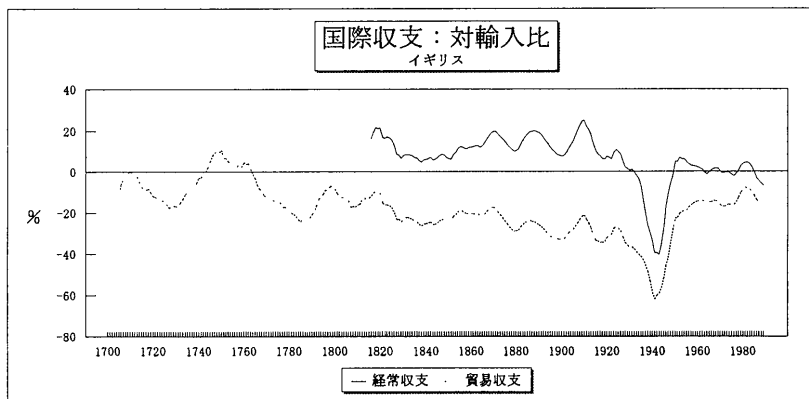


図10



入でそれを補っている。

フランスは、典型的にタイプAの国であり、19世紀前半はA 1 状態であり、それが後半になるとA 2 状態に落ちついた。その間、循環的変動がはっきりとみられ、第2次大戦後は、A 2 状態から次第にA 3 状態に変わってきている。

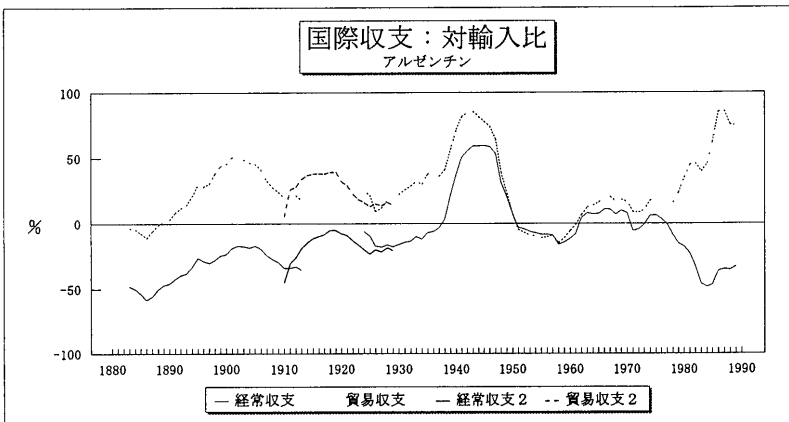
イタリアは、タイプAであるのは中国と同じく、季節労働者ならびに移民からの巨額の送金によるところが大きい。経常収支は黒字を維持していたとはいいがたく、むしろ赤字基調の中で海外送金が大きかった時期に一時的に黒字に転じていたといった方が適切であろう。したがって、イタリアの体質はA 3かA 2状態にあった。

連合王国（イギリス）の体質は、フランスときわめて似ている。しかし、フランスが19世紀前半ではA 1の状態にあったのに比べると、イギリスの場合は18世紀後半にはすでにA 2の状態にあったと推量される。18世紀前半にても経常収支は貿易収支より大きかったと推定され、A 1かA 2の状態を循環の変動の中で維持していたと考えられる。第2次大戦後は、やはりフランスと同じく経常収支は均衡状態を前後しており、ときには赤字にも陥っていた。（つまり、A 2とA 3状態にある。）A 2の状態がきわめて長期間続いていた点で、イギリスは特異な地位にあったといえよう。

#### 4. 2 タイプB

アルゼンチンは、1950年代の一時期を除けば、タイプBそれもB 2状態

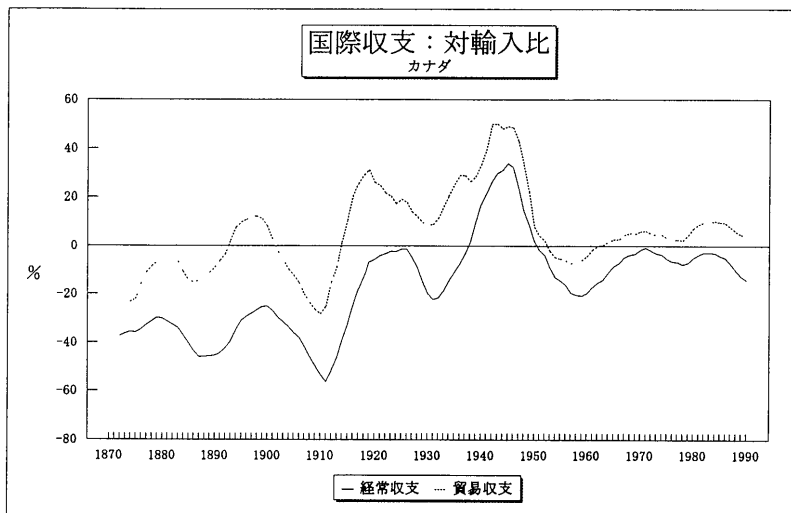
図11



を長期間維持していた。1889年のデフォルト以前は経常収支も赤字であるB3状態にあったのであるが、永続化せず輸入の抑制によりB2の状態に落ちついたわけである。第2次大戦の戦時景気は両収支とともに巨大な黒字を計上させたのであるが、1950年代になるとその反動が出て、1970年代以降は貿易収支と経常収支が全く逆方向に展開するというB2状態ながら特殊な形態を示している。

カナダも一貫してタイプBの国であったが、第2次大戦時まで循環的変動を示しながら、B3からB2、B1へと改善していったことがわかる。第2次大戦後をみると、ダイナミックな様相は薄れ、なお循環的変動を示しながらもB2の状態を維持していた。

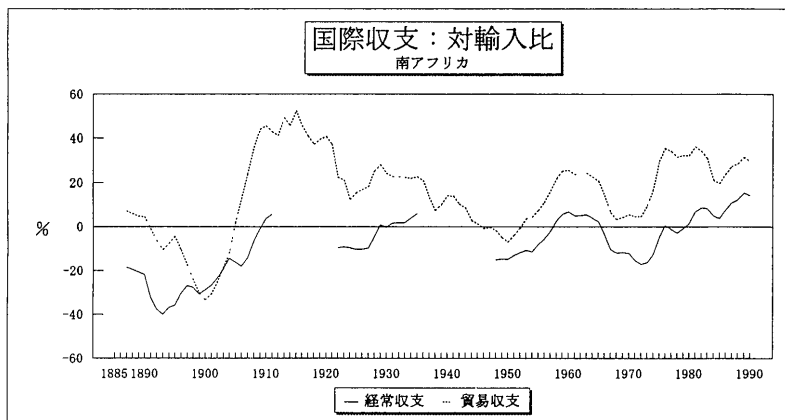
図12



南アフリカは、20世紀に入ってトランスヴァール大金山の発見により金輸出が貿易収支を大幅に改善させたわけであるが、経常収支はむしろ均衡値付近を前後するように推移していた。資本・労働の海外からの導入は南アフリカ経済にとって不可欠であり続けたのである。南アフリカは19世紀

末のB 3状態から抜けて、B 2，B 1の状態を繰り返してきた。

図13

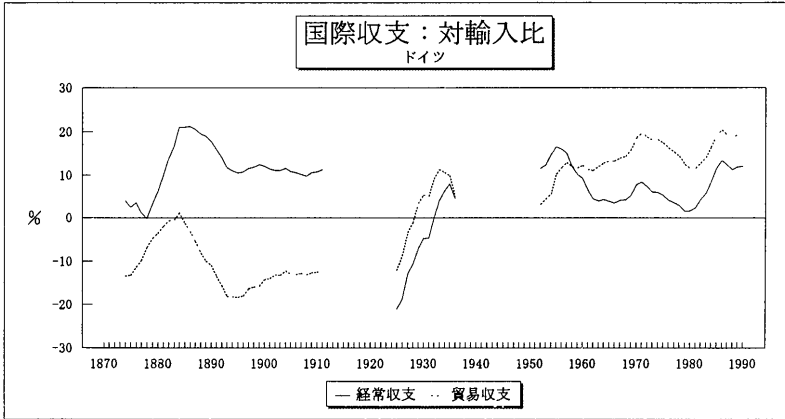


#### 4. 3 タイプの転換

第1次大戦がタイプの転換を促した国としては、まずドイツがあげられる。ドイツは、1870年代には貿易収支が赤字基調であり、とくに1889年以降は赤字幅は対輸入比においても拡大した。他方、経常収支は黒字であり、1880年代になると急激に拡大し、その後、対輸入比で10%程度に収まった。第1次大戦前のドイツはイギリス、フランスと同質のA 2状態にあった。しかし、大戦後は一挙に資本輸入国に転化し、タイプBに変わった。1920年代は資本輸入国のB 2状態であり、1930年代になるとB 1状態に転じた。これは為替規制による輸入抑制、貿易収支の黒字化に負っている。第2次大戦後になると、すでに1950年代後半から両収支は黒字のB 1状態に定着していた。

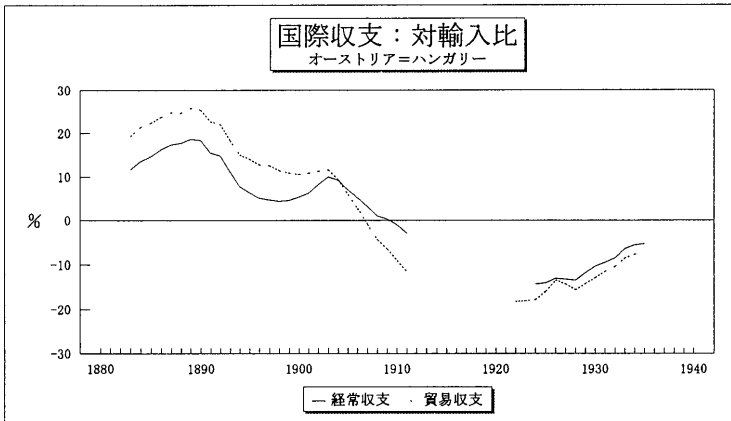
さて次のオーストリア・ハンガリーは、1905年頃を境にB 1状態からタイプAに転化して、第1次大戦直前にはA 3状態になっていた。大戦後はオーストリア・ハンガリー帝国が崩壊し、オーストリア、ハンガリー、

図14



チェコスロバキア 3 国の国際収支合計は図15のように A 3 状態を維持したままになっていた。タイプ A を維持させた要因としては、投資収益より移民から海外送金が重要であった。

図15



インド（第2次大戦後はインド、パキスタン、バングラデシュを含む地域）は、第2次大戦前まではタイプ B であり、B 1 または B 2 の状態にあった。大

戦後は、貿易・経常収支とも赤字化し、とくに1970年代以降になると、タイプAでA3状態になった。タイプAの要因はやはり季節労働者による送金であり、中国と同様に、インドも労働の移転による所得の受取は無視できない規模であったのであるが、1970年代になるとそれがより顕著に表れてきたということである。

図16

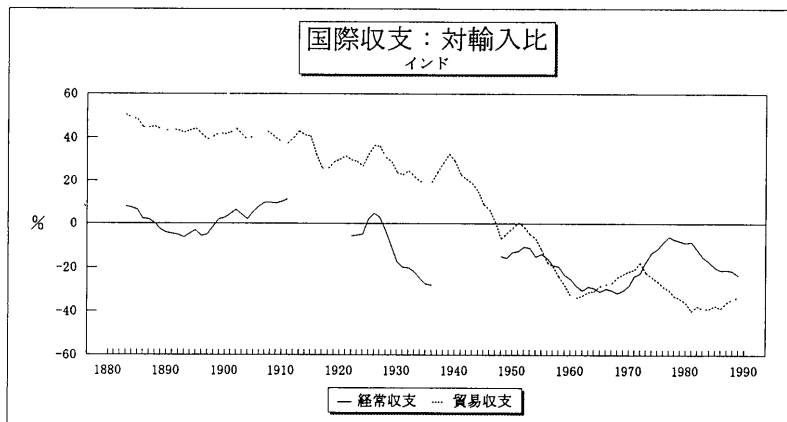
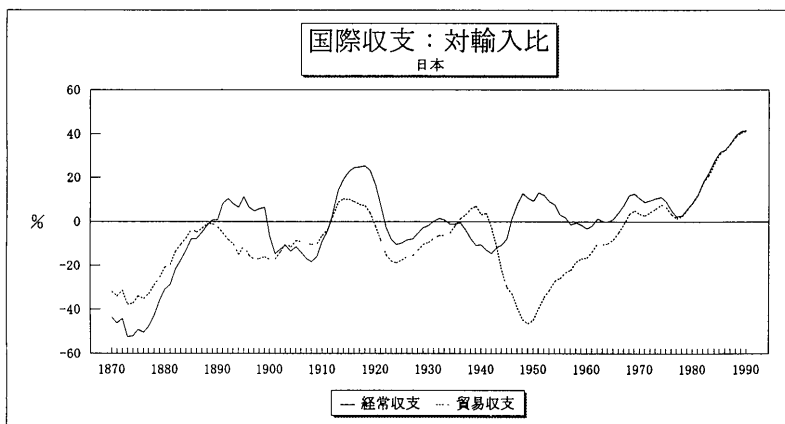


図17

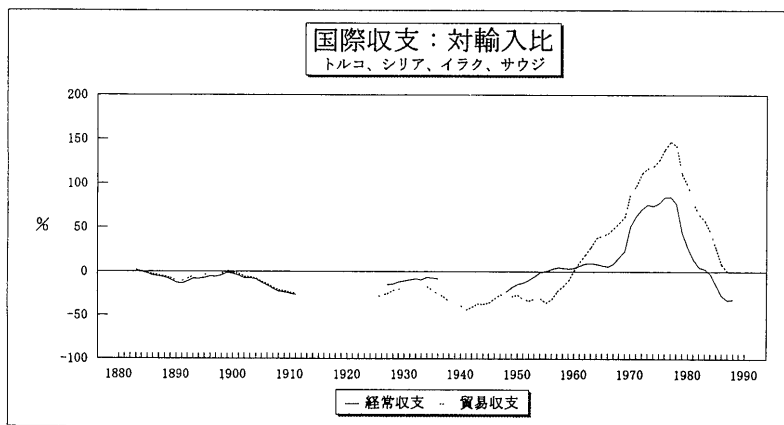




日本の場合、転換はむしろ早く、1890年頃にはタイプBからタイプAへ転換したと思われる。それでも経常収支に関しては均衡値を前後にして変動せざるを得ない状況にあり、貿易収支は1960年代半ばまで慢性的な赤字体質にあった。その意味で、A 2かA 3状態をくりかえしていたわけであり、それが1960年代半ば以降黒字に転じて拡大し続け、A 1状態が定着化したのである。

いわゆる中東地域は、利用可能な統計が時期、国によって異なるので一貫して表示できないのであるが、少なくとも第1次大戦以前のオスマン・トルコ時代ではB 3状態が維持されており、赤字幅は比率のうへでも拡大していた。1960年以前では、貿易収支は赤字状態であったが、その後石油輸出が経常収支に組み込まれていき、1970年代の石油価格の引き上げによりその収支は大幅な黒字を計上することになった。戦間期はA 3状態であったと推定されるが、第2次大戦後サウジアラビアの存在が大きくなるにつれて、その内容がより強く反映されて、B 1の状態が出現することになったのである。しかし、1980年代になると、経常収支は赤字化してしまう。巨額の黒字が1970年代の産物であったということである。

図18



スカンジナビア（デンマーク、ノルウェー、スウェーデン）は、タイプAのA 3状態がほとんどの期間で続いていた（ただし、戦間期はA 2状態が支配的であった）。1980年頃からそれが一転し、貿易収支が黒字化してB 2状態が出現した。これは北海油田からの原油収入によるところが大きい。

図19

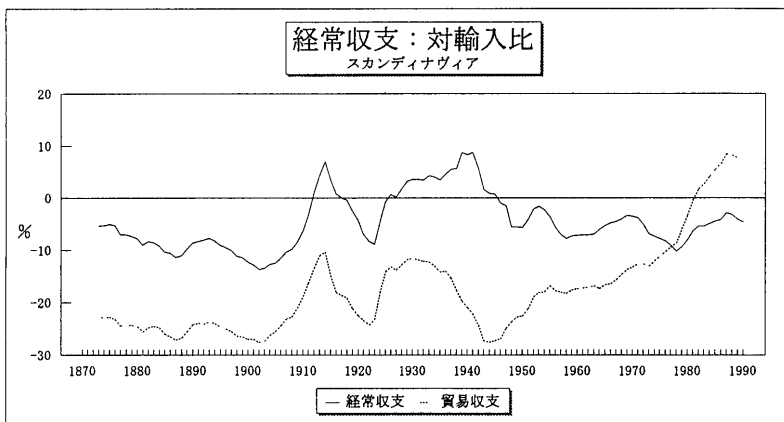
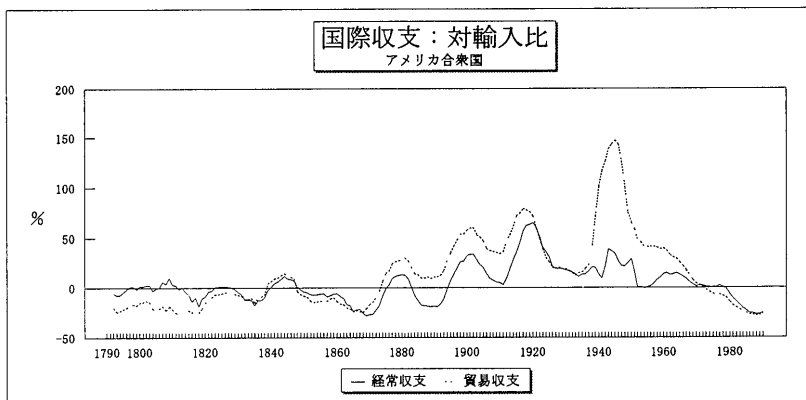


図20



最後に、アメリカ合衆国であるが、1870年頃を境にタイプAからタイプ

Bに転換している。それ以前ではどちらかというとA 3状態であったのに対し、その後はB 1状態へ循環的変動を示しながら移行している。そして、第2次大戦時をピークにしてその後比率を縮小させて、1970年頃を境に再びA 3状態に移行している。アメリカ合衆国の場合は、転換の反復がこのように明示的に確認されるのであるが、アメリカ合衆国の世界経済に与える影響力を考慮にいと、この2つの時期は世界全体からみても無視できない転換点であったと考えられる。

## 5. 転換のダイナミズム

第3節の地域別収支の比較から得られた成果は、少なくとも1880年代から第2次大戦までは一つのシステム（これを金本位システムと暫定的に呼ぶことにする）が構造的に維持されてきたということであろう。ただし、欧州が圧倒的な経常収支の黒字を得ていたのは第1次大戦までである。残余分からみた場合、貿易収支（商品取引）の上では第2次大戦までであり、経常収支（資本取引）の上では1930年頃に転換へ向けて変化が現れていた。

この金本位システムの特徴は、中核地域（欧州）がA 2状態にあり、それに相対する周縁地域（おもにラテンアメリカ、アジア）はB 2状態にあったということである。B 3状態やA 3状態もみられたのであるが、前者の場合は永続化できず、早晚B 2状態に移行せざるを得なかった。後者のA 3状態は経常的に見えざる輸出や海外送金などの移転分によって資本流入のコスト（金利支払）を賄うことができ、比較的長期間その状態を維持することができた。それでも基本的構図は、商品は周縁地域から中核地域へ流れ、資本は逆に流れていた。これを維持するためには、見えざる貿易と投資収益などによって資金が周縁地域から中核地域へ恒常的に流れていることが必要であった。

北アメリカ（とくにアメリカ合衆国）はタイプBであり、周縁地域の特徴をもっていたのであるが、貿易・経常収支ともに黒字化して（B 1状態に

なって) いき、金本位システムの中で異質な(ある意味では秩序破壊的な) 因子になっていった。戦間期の状況は、(少なくとも1920年代は) システム全体の構図は変わっていなかったが、欧州地域の経常収支は均衡化して資本輸出地域は北アメリカに移った。1930年代になると、欧州は逆にA 3状態になり、超過輸入のために資本を輸入する立場に変わっていった。第2次大戦へむけて商品も資本も欧州へ流れていくという意味で金本位システムの構造が崩壊してしまった。

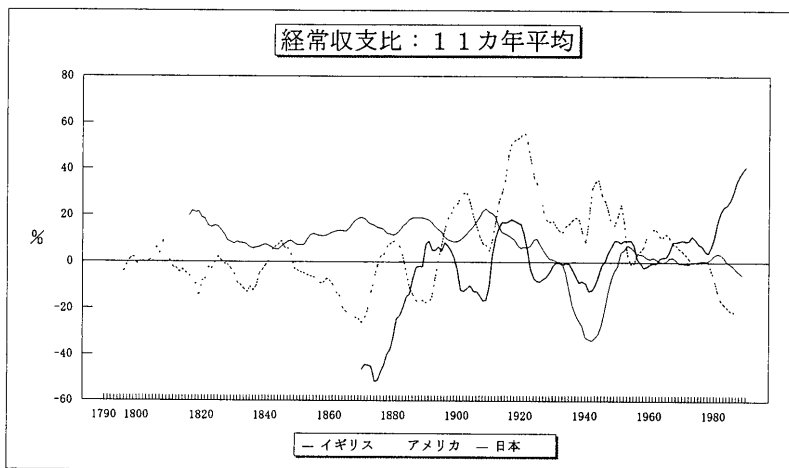
第2次大戦後のいわゆるブレトン・ウッズシステムは、1970年初頭の崩壊時期まで続くのであるが、国際収支の形状からもそれははっきりと確認された。このシステムの特徴は、金本位システムに比べて、総輸入に対する中核地域(北アメリカ)の貿易収支・経常収支の値が小さく、タイプB (B 1状態)を維持させていたことである。とくに経常収支の比率の小ささがめだつのであるが、これは貿易収支の黒字の一部を公的援助の形で大規模に移転させていたからである。これに対応して、欧州地域ならびにその他の諸国の貿易収支は赤字であるが、その総輸入に対する比率は小さくなく、同様に経常収支の比率も小さくなかった。その構図は、商品が中核(北アメリカ)地域から欧州を含めてその他の周縁地域に流れているが、その資金は資本輸出の形より移転の形でまかなわれていたということである。

1970年頃を境に観察されるシステムの転換は、北アメリカの貿易収支が悪化して、状態がB 1からB 2の方へ移行していったことに大きく負っている。これは逆にみれば、その他諸国において1960年代後半から状態がB 3から一躍B 1へ移行したということである。それは何よりも2つの石油ショックによって資金の流れが大きく変化した事実にも負っている。しかし、より構造的(または既存のシステム破壊)要因としては、日本の経常収支の継続的な黒字の計上化があげられる。実際、1980年代に産油国の国際収支は悪化していくのであるが、その他諸国全体としては日本を中心にB 1の状態を強化している。また、残余分の貿易収支は赤字の比率を高めてお

り、商品、資本ともに日本を含んだ地域から他の全地域へ流れるという構図が1970年代以降形成されていることは否定できない。

最後に、イギリス、アメリカ（合衆国）、日本の3カ国の経常収支の動きを比較して資本輸出国の変遷の様子をみていくことにしよう。図21には3国の経常収支（対輸入比）の11カ年平均値が描かれている。（ただし、2つの大戦期間はその形状を極端にゆがめてしまうのであらかじめ削除してある。）これをみると、イギリスとアメリカの逆相関の対応関係は、アメリカがタイプAからタイプBの変換を示した1870年代から観察される。この関係は、第2次大戦時まで続いていた。日本とアメリカの関係は第2次大戦以前は変動のずれがあって、対応していなかったが、戦後の1960年代にはいと、逆相関の関係がみられるようになる。とくに、1970年以降はつとに対称的である。

図21



#### 参考文献

- 明石茂生「国際収支と構造変化：1881—1991」成城大学経済研究所報告，1995。  
経済企画庁編『昭和59年版経済白書』大蔵省印刷局，1984。  
C. Kindleberger, *International Economics*, 3rd ed., Irwin, 1963。  
M. Lévy-Leboyer, “Présentation: La capacité financière de la France au début du XX<sup>e</sup> siècle,” in M. Lévy-Leboyer ed., *La position internationale de la France: Aspects économiques et financiers XIX<sup>e</sup>–XX<sup>e</sup> siècles*, Editions de l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, 1977。  
須田美矢子編『対外不均衡の経済学』日本経済新聞社，1992。